

「丁度良い」

本山布教教化部出版室長 蔵重 宏昭

今年も八月のお盆明けから暑い日が続いております。コロナ禍の影響で夏休みが短縮となり、お盆明けから多くの学校は授業を再開し、暑さの中登下校する生徒さんたちを見かけるたび「大変だな」と同情された方も多いのでは。

こうした時節柄ですので仕方ないのですが、ある時本山近くの界限で登下校する生徒さんたちの姿の中で、ある異変に気付いたことがあります。

通常ですと制服を着て登下校でありましようが、とある学校の生徒たちが、体操着とも違う校名の入った揃いのTシャツ・ハーフパンツ姿で通学していたのでした。確かにその格好ですと涼しげで、たまたまそばを通り過ぎるYシャツ・ネクタイ姿で背中に大汗をかき通勤するサラリーマンらしき方がたと、あまりに対比際立っていたことでした。校門前で出迎える先生たちも同じTシャツ・ハーフパンツ姿。その学校の時節を捉えた臨機応変さに「なるほど」と感心したことでした。

学校の登下校時は、やはり折り目正しく定められた制服で、という意見も当然あるでしょう。実際他の学校はそのようにしているようです。一方で、涼しければ無理に揃いにしなくても登下校時にはどんな格好でも、という意見もあるでしょう。

しかし一ついえることは、この学校によって選択された、縛られず崩しすぎない、この状況下に適応した “丁度良い” 決断であるということです。

徒に偏った一方の主義主張に凝り固まることなく、現状の環境に適応しその場その時の “丁度よさ” を見出そうとする柔軟な姿勢が大切なのだと改めて感じ取りました。

そしてこうした “丁度良さ” を見出そうとする油断ない前向きな姿勢こそ、昼夜の時間が同じお彼岸の頃、大切な理念として特に説かれる仏教の「中道」の指し示すところでありましよう。

お彼岸を迎え思うことは、「琴の弦は張りすぎてもゆるみ過ぎてもよい音色は出ない」の例えの通り、“丁度良い” 音色を奏でるべく「中道」の歩みこそ大切なのだということです、異常気象やコロナ禍といった昨今の特殊な環境下だからこそ。